sweet image,sweet

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｗｅｅｔ　ｉｍａｇｅ，ｓｗｅｅｔ

【Ｎコード】
Ｎ１２７３Ｑ

【作者名】
鈴木真心

【あらすじ】
午後三時四十五分。君だけを見詰めてる。

皆森羽雪の場合

午後三時四十五分、四階の窓際。
あたしの目が捉えるのは――たった一人。

窓を開ければ、心地良い初夏の風。
あたしのスカーフを巻き込んで、教室にふわりと吹き込む。
誰もいなくなった教室。
校庭からは、部活で走り回る人達が見える。
うだる様な暑さの中、彼らは元気にボールを追い掛けていた。
きらきらと光る汗を撒き散らしながら。

あたしはサッカーが好きな訳じゃない。
ルールも詳しくないし、テレビ中継も特別見たりしない。
でも、毎日この時間、あたしはここから校庭を見ている。
いつからだったろう。
きっかけは多分、些細なこと。

あの日あたしは、教室にノートを忘れた。

「あっ」

その日の帰り、自転車置き場であたしは小さく声を上げた。

「なーに、どしたの羽雪(はゆき)？」

サドルに跨りながら、友達の菜摘(なつみ)がこちらを向く。

「英語のノート、教室に忘れた」

自転車の上げたストッパーを戻して、カゴからバッグを取り出した。

「ごめん、取りに戻るから、先に帰ってて」

「もー仕方ないなあ」

ぶつくさ言いながら自転車を漕ぎ出す菜摘を見送って、あたしは教室に戻った。

教室は四階。

こんな時、エレベーターでもあればいいのにと心底思ったりする。

ほとんど誰もいない校舎は、昼間のそれとは違って、驚くほど静かだ。

僅かに差し込む柔い光が、階段の踊場を照らす。

あたしはこの時間帯が、割と嫌いじゃない。

たまにはいいか。

気持ちゆっくりと、歩みを進めてみた。

教室に着くと、案の定誰もいなかった。

時計を見れば、三時四十五分。

最後の授業が終わってから、そんなには経っていない。

「皆、帰るの早いな…」

あたしも似た様なものだけど。
独り言が寂しかったので、最後の一言は飲み込んだ。
あたしの席は、窓際の前から四番目。
後ろから二番目。
中途半端。
どうせだったら、一番後ろがよかった。

ごそごそと机の中を漁る。
なかなか見つからない。
置き勉している教科書達が、だばだばと床に散乱した。

「あー、もう……」

拾おうとして諦める。
椅子に座って、ぼんやりと教室の時計を眺めた。
何で、学校の時計は白くて丸くて無機質なんだろうか。
もっと可愛いのにしたらいいのに。
そんなことを考えて、只、ぼんやりとしていた。

「何してんの」

急に声を掛けられて、驚いて振り向く。
ドアの前には見知ったクラスメイトの河崎くんがいた。
汗だくの白いTシャツで、やっぱり汗だくの顔を拭っていた。

「……ああ、英語のノート忘れちゃって」
「……で、それ？」

彼の視線の先には、散乱したままの教科書達。
心無し、彼は笑っていた。
拭い切れなかった汗が、きらきらと光る。

「河崎くん、部活でもやってんの？」
「そう、サッカー。そこから見えるでしょ」

言われて窓の外に目をやる。
ほんとだ。
暑そうだなあ。
けれど、気持ちよさそうにも見えた。

「拾うの手伝うよ」

がさがさと散乱した教科書達を彼はかき集め始めた。
いい人だな。

「ありがとね」

重い腰を上げて、あたしも一緒になって拾う。
間近で彼を見たのは、初めてだった。
柔らかそうなほんのりと茶色がかった髪。
日に焼けて健康そうな肌。
人懐っこそうな顔立ち。

「……顔、可愛いんだね」

よくよく見たことなんてなかったけれど。
思わず、口をついて出た言葉に、彼は顔を上げて笑った。
何だか、ほんとに可愛かった。

「サッカーしてる時は、多分、格好いいよ」

可愛いはまずかったのだろうか。
少し、反省した。
英語のノートだけ手に取り、拾い集めた教科書を机に仕舞う。

「俺もそれ、取りに来たんだ。明日、小テストだもんな」

やだなー何て言いながら、彼も自分の机からノートを取り出すのをぼんやりと眺める。

自習なんてするんだ。

何かいつもクラスの中心でわいわいやってるから……意外。

「暇なの？」

もう一度汗を拭って、ふいに彼はそう言う。

「んーまあ、忙しくはないけどね」

帰宅部だし、明日が小テストって言っても、帰ってすぐに勉強する訳でもない。

そう考えると、わざわざ部活中にノートを取りに来た彼は、あたしより大分真面目なのかもしれない。

「じゃあさ、そっから見てなよ。俺、格好いいから」

「自分で言っちゃうんだ」

「言っちゃうよ」

笑いながら、彼は部活に戻って行った。

それからあたしは、毎日ここから河崎くんを見ている。
特別、親しい訳でも無い。
たまに、挨拶する程度。
只、前よりは話す様になった。
携帯番号も、メールアドレスも知らない。

あの時の笑った顔が、何となく目に焼きついて、離れない。

彼はボールを追い掛ける。
うだる様な暑さの中、彼は校庭を走り回る。

あの時の可愛いと思った気持ちが、何となく別のものに変化して行く。
そんな気がした。

校庭に、集合の笛が鳴り響く。
部員達が駆け足で集まって行く中、彼がこちらを向いた。

一瞬、目が合う。

彼は軽くあたしに手を振って、それから笑った。

ああ、そうか。
そういうことか。

あたしも笑って、手を振り返した。

午後三時四十五分。

あたしは多分、君だけを見てる。

河崎志信の場合

午後三時四十五分。
俺はきっと――君の視線だけ感じてる。

うだる様な暑さの中、ボールを追い掛ける。
汗の滴が頬を伝って行くのを感じて、俺はそれをTシャツで拭った。
暑い。
広い校庭を駆け回って、とにかく暑かった。

「最近さあ、志信(しのぶ)、頑張ってんなー」

もう一度汗を拭った俺を見て、いつの間にか隣に来ていた三鷹(みたか)がにやっと笑う。

「あいつも最近、毎日見てるよなー」

ちらっと四階に視線を投げてから、また俺を見てにやっとする。
三鷹が言うあいつっていうのは、クラスメイトの皆森羽雪(みなもりはゆき)だ。

「皆森ってさ、あんまり男子に興味とか無さそうなのになー。冷めてるっていうか。なーんかあったー？」
「……何もない」
「へーえ」

悔しい。
にやにやしながら俺をつつく三鷹には、きっと絶対、明らかにばれている。
赤らむ顔を隠す様に、もう一度、汗を拭った。

――ざわつく前の朝の廊下。

俺はいつもより早い時間に、そこを歩いていた。
午後とは違う朝の光が、階段を照らしている。
賑やかなのもいいけれど、たまにはこういうのも悪くない。
少し清々しい気持ちを感じながら、滅多に無い落ち着いた雰囲気の廊下を堪能する。

「うん、何かいいね」

思わずそう呟いて、独り言を零した自分に、少し笑った。

今日は多分、一番乗り。
たまにはそれも、悪くないな。
そんなことを思いながら、俺は教室に向かった。

「おはようございまーす」

ドアを開けながら言ってみる。

「あ、おはよう」

予想外に挨拶が返ってきて、俺は顔を上げた。
思わず固まる。
窓際の前から四番目、後ろから二番目の席。
バッグを机の上に置いた、笑顔の皆森がいた。

「入らないの？」

固まったままの俺に、不思議そうな顔をして視線を投げている。

「……早いんだね」

平静を装いながら、後ろ手にドアを閉めて言った。
余りにも普通の言葉しか返せなかったことに、ほんの少し後悔の念が胸を掠める。
もっと気の利いたことが言えたらよかったのに。
そんなことを思って、溜め息をついた。

「そっちこそ早いね。いつもこの時間、あたしだけなんだよ」
「そうなんだ」

知っていたら、毎日早く来たのに。
そうしたら、話が出来るのに。
明日も早く来ることを密かに決めて、俺は席に着こうと足を進めた。

「あ」

だばだばと音がして振り返れば、またもや皆森は教科書を散乱させていた。

「……置き勉しすぎじゃない？」

眉を下げてそれらを見詰める皆森に、思わず笑った。

冷めてる、何て、一体誰が言ったのだろう。
彼女は普通に、忘れ物もすれば置き勉だってする。
どこかぼんやりしていて、見た目よりずっとうっかりもしている様に思えた。

そうかな、何て言いながら一緒に笑った彼女に近付いて俺は腰を屈める。

「手伝うよ」
「ありがとう」

そう言って座り込んだ彼女と、額がぶつかった。
顔を上げると、思った以上に近い距離。

「ご、ごめん！」

思わず仰け反った。
赤らむ顔を腕で隠して、それでも目が離せない。
どうしよう。
俺、多分――。
確信してしまった自分の気持ちに、必要以上に戸惑う。

「……あのね、」

ぶつかった額を押さえながら、彼女が呟いた。

「サッカーしてる時、格好いいよ」

額を押さえるその手で、表情がよく見えない。

けれど、見間違いでなければ、それは少しはにかんでいる様に見えた。

「……あ、ありがと…」

そう答えるのが精一杯で。
可愛いじゃなくて、格好いいと言われたことが嬉しくて。
今日も頑張ろうとか、思ってしまったんだ。

散乱した教科書を拾い集めた頃、教室がざわつき出す。
一人、また一人と増えて行くクラスメイトに、俺は距離を取られてしまった。

放課後。
今日も俺は、ボールを追い掛ける。
集合の笛を合図に、無意識に四階を見上げた。

うだる様な暑さと、初夏の風。
俺を見ている皆森がいた。

軽く手を振って笑えば、皆森も手を振って笑う。
そんなことが嬉しくて、もっと笑ってしまった。

「……ふーん、やっぱりね」

にやにやしながら、三鷹が横を通り過ぎて行く。
やっぱりそうなんだと、俺も思う。

「羨ましい？」
「ばっ、そ、そんなんじゃねえよ！」
「ふーん？」

思わぬ返しに狼狽えた三鷹がおかしくて、声を上げて笑った。
気付いた男は強いんだぜ、と言えば、三鷹は隣で焦っていた。

明日も早く来よう。

もう一度そう思って、俺は駆け出した。

午後三時四十五分。
俺の赤らむ顔は、多分、暑さの所為じゃない。

河崎志信の場合（後書き）

２０１１年１月１２日自サイトより移転掲載。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1273q/

sweet image,sweet

2011年1月16日10時11分発行